

---

## エミリー・ブロンテの研究

—Sadism—

宮 川 下 枝

Emily Brontë は Heathcliff という人物を通して深く人間性を追求し、人間のもつ愛と憎しみに鋭いメスを入れつゝ人間の両面性を描写しているが、これは私の前回二回の論文に於いて研究して来た処である。だがこの難解な人物に就いては、

“for superficial observers less than nothing....”<sup>(1)</sup>

と姉 Charlotte も述べている如く、皮相的な読み方では到底完全に理解出来るものではなく、熟読玩味しなければ分らない。エミリー自身が姉 Charlotte にとってゞさえも分り難い人物であったと同じように、ヒースクリフも我々にとって理解の限度を超えるものが多い為に、私も数々の点を未解釈のままに残しているのです、これ等を逐次解明してみたいと思うのである。

前回に於いて、次のような疑問点を残していた。

- (1) 親への怨を子供に復讐して腹いせをする点。
- (2) ヒースクリフの中に存する不思議な力。

「絵で子供に体当りの憎悪をぶっつけて親への怨を晴らすという、当の本人にぶつかってゆくものでない非常に見当違いの感情の吐き出し方は一体何に原因があるのでしょうか。」

今回はこの件から考えて行きたい。

この理解に苦しむようなヒースクリフの憎悪に満ちた行為はたとえ、それが人間の真の姿の一面を掘り下げて捉えたものであるにしろ余りの残忍さと顔をそむけなくなる程の激しさに一体その原因は何であろうかと考えた人も多く、こゝに非常に参考になり又興味深い論説にゆきあたったので先づそれから紹介しよう。

- (1) Sadism, (2) Infanticide に関する

---

(1) Biographical Notice of Ellis and Acton Bell—Charlotte Brontë

以下次の一連の説は Wade Thompson による

“Sadism and Infanticide in *Wuthering Heights*,”

「嵐ヶ丘に於けるサディズム(加虐)と嬰兒殺害について」

なる論文によるものである。

(1) *Sadism* (サディズム)

Heathcliff shows Isabella what kind of man he is by hanging her little pet springer. <sup>(1)</sup>

ヒースクリフは自分がどんなに残酷な人間であるかを見せる為にイザベラが大事にしている小犬をつり下げて見せる。

Heathcliff set a trap over a lapwing's nest full of little skeletons. <sup>(2)</sup>  
ヒースクリフはながげり(鳥)の巢に罠<sup>ワナ</sup>をかけて、そこには鳥の死骸が沢山あった。等の如く実にあげつない迄の残忍さを楽しんでいるような場面が数多く見受けられる。Thompson は更に多くの同じような描写の場面を引き出している。

Thus Edgar Linton could no more leave Catherine than a cat could leave a mouse half killed, or a bird half eaten. <sup>(3)</sup>  
猫が半殺しのねずみや食べかけの小鳥を残して去ることが出来ないように、エドガー・リントンも去る勇気はありませんでした。

Isabella in Heathcliff's hands is like a little canary in the park on a winter's day. <sup>(4)</sup>  
イザベラもヒースクリフの手にかゝれば寒い冬の日のカナリヤのような哀れさであった。

His abode at the Heights was an oppression past explaining. I felt that God had forsaken the stray sheep there to its own wicked wanderings, and an evil beast prowled between it and the old, waiting his time to spring and destroy. (*Wuthering Heights* Chapter X)

嵐ヶ丘に彼がいるというのは、いゝ表わしようのない重圧でした。いかにもわたしには神に見放された迷える羊ヒンドレーが悪のさまよいを続けるところへいま一匹の性悪の野獣がしのびより、囲地へもどろうとする羊の路ちに立ちふさがってとびかゝって食い殺す機会をねらっている、という感じでした。

以上の如く動物をいぢめる残忍性をもって人間の冷酷さを描いている。同時につねったり (pinch) ひっぱたいたり (slap) の他人の痛み (pain) に快感を覚える言葉も多く使用されている。

又数々の乱暴な日常行動が描かれている。

Catherine wakes Nelly Dean up, not by shaking her gently, but by pulling her hair. <sup>(5)</sup>

キャサリンはネリーを起すのにそっと揺り動かすのではなく髪の毛を引っばって起し whose nose she pinched as he ate <sup>(6)</sup>

キャサリンは何か食べ乍ら側の小犬の鼻をつまんでみたりする。勿論ヒースクリフの乱暴極りなき行為は随所に見受けられるのであるが、こうした行為は要するに、これはすべて弱いものをいぢめて快感を覚えるサディズム (加虐) の世界であると結論を出しているのである。そしてこのサディズムこそが「嵐ヶ丘」を説明出来る基調であると説いている。

In summary, then the world of *Wuthering Heights* is a world of sadism, violence, and wanton cruelty. <sup>(7)</sup>

又この sadism (加虐) の世界であると同時に violence (暴力) wanton cruelty (勝手気まゝな虐待) の世界でもあると結んでいる。

エミリー、ブロンテは早くに母を失い、女中に育てられたり、おばに育てられたり、大人の虐待に耐えていかなければならなかったから、このような大人は弱い子供をいぢめるものである、強いものは弱いものをいぢめるのであるとの考えが根強く植えつけられたものであると説明している。非常に興味深い納得し易い説ではあるが、私には全面的に承服し兼ねるものがある。

私としてはもう少し別の見方をたててみたい。病弱な作者が病を押して最後の瞬間迄家事を遂行し又医者にかゝることもなく日常生活を平常通りのペースで守り通してゆき最後に階下を下りて「お医者様を呼んで」と頼んでソファによりかゝり息たえて行ったというあの並々ならぬ勇氣は姉シャーロットも云っている通り

The awful point was that, while full of ruth for others, on herself

(1)~(7) Sadism in *Wuthering Heights* (Wade Thompson)

---

she had no pity; the spirit was inexorable to the flesh... (1)

彼女は常に自分の肉体に対しては残酷であった。人に憐みを乞うのは耐えられないことであったと述べているが、この常に自分自身への厳しき、自虐とでも云うべき言葉があるならば、そのような言葉を用いたい処であるが、英語では (self-torture) とでも云い表わしてよいのであろうか。そのような自分への厳しきが基調をなしているのであると解釈したい。したがってその自分への厳しきは他に対する態度となって現れる。即ち悩んでいる人間を手とり足とり指導するというような箇所は見当らぬ。例を拾ってみると、少女 Catherine は裕福な家庭の青年である Edgar Linton より求婚され、思いあまってネリーに相談する。ヒースクリフを心から愛していることを知っているネリーはこの少女の気紛れは勿論気に喰わぬ。世間一般的にありふれた結婚条件にキャサリンが釣られていこうとするのに、がっかりしながらも、自から買って出て、事を拾収しようとはしない。

“Well, that settles it: if you have only to do with the present, marry Mr. Linton.”  
(*Wuthering Height* Chapter IX)

「よござんす、眼の前のことだけ考えるのでしたら、リントンと結婚して好きなようになさい。」と突き放してしまう。

別の件では、兄としてのエドガー・リントンが妹イザベラの窮地を見通す箇所がある。

Isabella sent to her brother, some six weeks from her departure, a short note, announcing her marriage with Heathcliff. ...at the bottom was ..an entreaty for kind remembrance and reconciliation. Linton did not reply to this.  
(Chapter XIII)

イザベラは兄の許さぬヒースクリフと恋に落ちたところで結婚出来る筈がない。当然の結果として駆け落ちまでしてしまうが、これは実際には巧なヒースクリフの復讐手段にひっかゝっただけのことだった。長い手紙をネリー宛に出すが、兄エドガーは一言の慰めの手紙も書いてやらないし帰って来るようにも云ってやらない。

又一个の例をあげるならば、二代目 Cathy が月明りの夜、雪を蹴ってヒースクリフの子供リントンのもとへ忍んで遊びに行く件がある。

---

(1) Biographical Notice of Ellis and Acton Bell

これはネリーに発見され、さしとめられてしまうが少女は心押さえることが出来ぬまゝひそかに文通している。これ又眼の鋭いネリーの見破る処となるが彼女は冷酷にもその手紙の束は焼き捨てることを命じる。

“I will have one, you cruel wretch!” she screamed, darting her hand into the bundle, and turning anew to the door....

She emptied her blackened pieces into the flames, and motioned me to finish the immolation. It was done : I stirred up the ashes....

(*Wuthering Heights* Chapter XXI)

「いち悪、一つか二つはとっておきたいわ」とキャシイは叫んで手紙の束の中に手を突込む。

だがネリーはキャシイの悲しみ歎願などにはお構いもなく手紙を燃してしまふ。

キャシイは泣く泣く大切にそっと貯めていた手紙の束を焼いてしまふが、こうした一見残忍な行動の中に私はエミリーの厳しい人生態度というものを見通すことは出来ない。一片の甘えも許さぬ厳しさ、それは弱い自分の体に鞭打って死の瞬間迄頑張った彼女自身の生活態度であり、自分自身への厳しさに外ならぬものであると思うのである。

結婚という人生の一大事にあたって思い悩むキャサリンに対して、突放してしまうネリーの態度、妹に表面的な親切心は現わさぬエドガー、その手紙は如何に大切に思えるものであろうとも焼き捨てさせるネリー、それらは皆大事にあたっては、人間は総べて自分で事にあたってゆかねばならぬ、人に頼ってはいはならぬと教えるエミリー・ブロンテの真摯な生活の姿勢と受け取れるのである。私も一度は弱いものいちめの快感であろうかと疑ってみたが、もっと深い厳しい愛の現れであると解するのである。

更にこの説は延長して「子供に体当りして非常に見当違いの復讐となるのは何故であろう」との疑問の解明ともなるわけである。

## (2) *Infanticide*

In the first place, we may note that the children in *Wuthering Heights*, like the children in the Brontë household, are left to tend for themselves early in life without the love or protection of their mothers.

「嵐ヶ丘」に出てくる子供達は早くから両親を失い親の愛情なしに成長している。

Even the children who receive motherly care throughout their childhood do not receive it long after they reach puberty.

たとえあるものは親の世話を受けたとしても思春期に到る迄親は生きていてくれなかった。

Without the care of their mothers, the children find themselves in a fierce struggle for survival against actively hostile adults who seem obsessed with the desire to kill or maim them.

両親の愛情なしに子供達が生きていく場合には敵意を抱いた大人たちは、彼等を殺してしまいたい、不具にしてしまいたいとさえ思っているのであるから、生き延びる為には激しい闘争をしなければならない。

The killing of helpless animals forms the basis of numerous metaphors.

頼りない動物達を殺すというのは、小説の中に方々に出てくる処であり比喩としても用いられている。

Directly and indirectly, then, Emily Brontë envisions a world in which the young and the weak live in constant peril....

As Leicester Bradner has pointed out, Emily Brontë seems to have been obsessed with the vision of a young, lovely, happy child growing up to a life of misery and or crime. Death for the child would clearly be better than life.

直接間接にエミリー・ブロンテは幼い弱い者達が常に危険にさらされている世の中を心の中に描いている。そして、幼い可愛い、幸福な子供達が惨めな大人と成長したり、罪を犯す人間として成長したりするような考えにとりつかれ悩まされていた。

子供にとっては生きることより死ぬ方が却って幸いであると迄に考えていた。

In summary, then, the world of *Wuthering Heights* is a world of sadism, violence, and wanton cruelty, wherein the children—without the protection of their mothers—have to fight for very life against adults who show almost no tenderness, love, or mercy. Normal

emotions are almost completely inverted: hate replaces love, cruelty replaces kindness, and survival depends on one's ability to be tough, brutal, and rebellious.

要するに「嵐ヶ丘」の世界は加虐愛、暴力、冷酷の世界であるから、子供達は親の愛情、保護がなければやさしさも愛情も情もない大人達の間で自分達の生命を闘いとしていかねばならぬ世の中である。あたりまえの感情もすりかえられて、逆になってしまう。愛は憎しみとなり親切は冷酷となり、生きのびる為には丈夫で残忍で反逆的であり得る力が必要である。

One is struck by the terrible irony of the fact that, after her death, Catherine wishes to return—and indeed does return—not as an adult, but as a child.

それにも拘らず、キャサリンが亡霊となって現われるのは子供の姿をとってのことであり、彼女が子供に帰りたい願いをもっていたことは驚くべきぞっとすることである。

..As a child Catherine is endowed with a kind of masculine power that....

子供の頃に彼女は男の子のような力に溢れていた。

And Catherine is just as dedicated, 'I am Heathcliff', she insists—and so long as she can fully identify with him, she is strong.

私はヒースクリフだと云ってヒースクリフと一体性を信ずることが出来たのは、子供時代の力に満ちていた時の信念で、又彼女は彼と一体であると信ずることの出来る限りに於いては勇氣に満ち満ちていた。

The source of her strength, however, is Heathcliff. Without him, she gradually finds herself unable to endure pain or to keep herself possession, and her temper becomes uncontrollable.

故に彼女の力の源はヒースクリフであったのであるから、彼がいなければ彼女は徐々に力を失い苦しみにも耐えられなくなり、冷静さも失い、感情も統御出来なくなってしまふ。

Her marriage to Linton serves only to weaken her, したがってリントンとの結婚は彼女を完全に無気力にしてしまふ。

'I wish I were a girl again', she cries pathetically,

「あゝ私はもう一度少女になりたい」とキャサリンが叫ぶのは子供の頃のあの確信と力に満ちた頃に帰りたいとの彼女の切なる願いである。

While Catherine's return in the role of a child fulfils her yearning to regain her childhood strength, it also betrays the fact that only as a child was she ever able to love Heathcliff.

キャサリンが子供の姿で亡霊として現われたということは、子供としてだけ彼女はヒースクリフを愛することが出来るのであるという事実を示しているし、もう一度子供時代に帰りたいという彼女の願いも示している。

To her, Heathcliff is, and always will be, her wild 'childhood' lover;

彼女にとってヒースクリフは、あの野性的な子供時代の愛人であった。

The 'love' she can offer Heathcliff is precisely the love she offered him as a child.

彼女がヒースクリフに捧げることの出来た愛は、子供として捧げることの出来た愛であった。又これはヒースクリフにしても同じことであって無邪気な子供時代をキャサリンと兄妹同様に育てて来た身としては自分の思春期をどのように取り扱ってよいか分らなかった。

She fails to see that her entrance into puberty requires a radical change in her relation with Heathcliff, and cannot understand his behaviour after her return to Wuthering Heights. Her attitude towards him remains as it was before puberty, but he recoils 'with angry suspicion from her girlish caresses'.

スラッシュ・クロス屋敷に行っている間にすっかり育ちもよくなり美しくもなり大人びて来たキャサリンはヒースクリフへの懐かしさ一杯で嵐ヶ丘に帰って来るが既に思春期に入ったヒースクリフは昔の無邪気な少年として彼女を迎えることは出来ない。まぶしいものでも見るように妙に面はゆくて彼は却って退り込みしてしまうが、成長してしまった彼を彼女は理解することが出来ずにいる。

Because Catherine had been unable to meet the demands of adult sexuality, Heathcliff takes revenge by imposing adult sexuality on children her child and his.



そしてキャサリンはヒースクリフの大人の愛の要求には応えることが出来ない。この不満、満たされなかった愛の不満をヒースクリフは何処かで復讐しなければならぬ。この仕返しを彼は自分の息子リントンとキャサリンの娘キャシイとの sex にかけるのだと Wade Thompson は述べている。

子供時代の自由奔放な愛にかえれないことは二人をいらだたせる。

Eventually, however, Linton is killed. The revenge is complete.

この結果として無理強いにキャシイとの結婚を迫られたリントンはその虚弱な体にも拘わらず、父ヒースクリフの強引さに押されて彼女との事実上の結婚をする。かくして弱い体に鞭打って強引な父の願いをききその敵命を守ったリントンは病氣重って死んでいく。ヒースクリフの復讐は成就したのでであると説明している。

Linton is killed. The revenge is complete.

たしかに明快な解釈であってヒースクリフの見当違いの復讐も成程とうなづき理解出来るに足る興味深い論説である。

### (3) 美の完成

だがエミリー・ブロンテの真意を把握してみたいと思う時、以上のような説明では余りにもエミリーの偉大な思想信念を無視したものであると思わずにはいられないのであるが、如何なものであろうか。確かに彼女は陰鬱な Yorkshire 地方の片田舎に住み、見るものきくもの洗練されぬ田舎人の粗野な生活であった。又当時そのようなことが現に行われて居たのかも知れぬ、呑文明のすゝんだと思われる現代の世界に於いても嬰兒殺しとか幼児誘拐<sup>カイ</sup>とか、はた又幼児捨児とか常識では考えられない事件が続出して新聞紙上を賑わしている時代であるから、100年余り前の英国の片田舎に於いても当然の出来ごとであったろかも考えられる。又ブロンテ姉妹の心を常に悩ましていたことに、ブロンテ家のたった一人の男の子である弟パトリックの行状というものも、この残忍なヒースクリフのモデルとなっているとは多くの人の伝える処であるが、私は矢張り総べてを自分自身をいためつけようとする自虐の精神が他に及んだものであるとの考えを延長してゆきたい。虎も自分の子供は穴に突き落すという。可愛い子供であればなお更それを鍛えたい、甘やかしてはいられない、との親としての深い愛の現れであるに過ぎないと、とりたいたのである。だがたしかにヒースクリフ

がリントンをキャシイと無理矢理に結婚させようとする場面は、これを親の愛、自分への厳しさとどうして解釈出来ようかとも考えられるのであるが、そこは彼にとってのキャサリンとの果されなかった愛の傷手というもののが如何に傷口の深いものであったかを示すものになるのだと思う。ヒースクリフはキャサリンとは精神的な愛に一貫し、死後十八年も彼女の幻を胸に抱いたまゝ彼女のいる天国に行くことを、否、地下と一緒に埋められ容解して一つの体となることのみを楽しみに死んでいくのであるが、死後の体の結合では如何にも侘びしいもの足りぬものであろう。歓喜に満ちた死であらうと (Those black eyes! That smile.) 矢張り底には満たされぬものがあったことは否めない。だからこそヒースクリフは墓でせめて体だけでも一体にして欲しいと願う。

Heathcliff takes revenge by imposing adult sexuality on children.  
her child and his.

Thompson は自分の叶えられなかった sex を自分の子供とキャサリンの子供、次の世代にかけての復讐と述べているが、これは復讐ととるべきものではないのではないかと思う。勿論この二人を結婚させて「嵐ヶ丘」「スラッシュクロス屋敷」の両家を統合したいのは、ヒースクリフの復讐の一つの目標であり、二人を無理強いに結婚させる行動には功をあせり過ぎ目に余るものがあるが、これを子供に対する残虐性とのみは受け取れない。あの無理矢理な結婚のさせ方はヒースクリフの愛の真の姿を見せるもので、自分の成就出来なかった愛を子供には果させてやりたいという親の切実なる願いである。それを本人が意識しているか、いないかは別として、過去にさかのぼって考えるが、キャサリンがネリーに打ち明ける言葉をぬすみ聞きして絶望したヒースクリフが失蹄してから二年の月日が流れた。誤解の二年が明ける。漂然と戻って来た彼は遅しく成人しているが、キャサリンは既に人妻となっている。だが心着かないのはキャサリンの方で彼の訪問を受けてからは、彼への慕わしさ、又夫リントンの嫉妬を受け遂に病床に臥す。こゝではじめて二人はお互の愛を確かめ合う激しい言葉を交わすが、

"Oh, Cathy, Oh, my life! how can I bear it?" (Chapter XV)

「おゝキャシイ。僕の生命だ。別れられてたまるもんか」弱り果てた恋人をどうすることも出来ない。生命を引き戻すことは出来ないのであって、

"Cathy, do come. Oh, do \_once more!" (Chapter III)

「キャシー帰って来ておくれ。一度だけでいい。」と死後の亡霊に向って動哭してみた処でどうにもならない。把握したかったのは生命あるキャサリンであり、それを通した口惜しさは並大抵ではない。生命あるうちに急いで、とは親の心の底からの願であると解釈したい処である。

“Come, come—have done, and get to bed.. (Chapter XXVII)

「さあ実行してしまえ。」とリントンに結婚を迫る言葉は余りも赤裸々な言葉にも思えるが、彼の願の成就の為の言葉に衣着せぬ裸のまゝの直截な言葉とも受け取れるのである。

Heathcliff takes revenge by imposing adult sexuality on children,  
her child and his.

果せなかった sex の願いを子供に果させて復讐をしたと、とらないで（こゝは復讐とはとりたくない処であって）生きているうちに愛する人と結婚しなければどうにもならないではないか、とあせる親の愛のうらはらな現れ方をした行為であると思うのである。自分の一番の願いはキャサリンとの結合であった。が今こゝに自分の息子に対してものその心の中にある願いを果させてやりたい。虚弱で死期の近づいている息子はその願いは自覚していないであろう。自分が少年の頃自分の本当の願いを自覚しなかったように無自覚のままに過ぎてゆくのは余りにも可哀そうで見ると恐びないものがある。非常手段ではあったが、あの手この手を尽して無理矢理におびき寄せたキャシーと遂に結婚させることが出来た。ということは彼にとっては如何にも大きな喜びである。小説の第一章は得意満面のヒースクリフの登場から始っているところからみても作者が如何にこの瞬間を重大視したかが分る。ロックウッドも彼を評して「素晴らしい人だ」と伝っているのもこの辺の消息を伝えるものであろう。彼の心の底からの願望が叶えられたらもうこれ以上の復讐の必要はない。

Revenge is completed. と云わず His desire is accomplished. と云いたい処である。そうすれば

I am too idle to destroy for nothing. (Chapter XXXIII)

「もう破壊など面倒くさい。」とのヒースクリフの言葉が活々として来る。これ以上びつたりの解釈はないのではなからうか。そして彼がネリーに切々と訴える不思議な心境の変化となるのである。

"It is a poor conclusion, is it not?" he observed, having brooded a while on the scene he had just witnessed: "an absurd termination to my violent exertion? I get levers and mattocks to demolish the two houses, and when everything is ready and in my power, I find the will to lift a slate off either roof has vanished! My old enemies have not beaten me; now would be the precise time to revenge myself on their representatives: I could do it: and none could hinder me. But where is the use? I don't care for striking; I can't take the trouble to raise my hand! That sounds as if I had been labouring the whole time only to exhibit a fine trait of magnanimity. It is from being the case: I have lost the faculty of enjoying their destruction, and I am too idle to destroy for nothing."

(Chapter XXXIII)

(訳) (5号にて訳しているので省く)

何回読んでもこの彼の monologue とも云うべき大告白の言葉は深く胸を打つものがある。大事業を果したものののみ云い得る一大演説とも受け取れる。長い間の宿望が果されたからこそ復讐が何になるであろうと考えるに到ったと考えるのが、この場合の極く自然な妥当な解釈ではなからうか。

I could not think him dead; but his face and throat were washed with rain; the bed-clothes dripped, and he was perfectly still.... I tried to close his eyes; to extinguish, if possible, that frightful life-like gaze of exultation... they would not shut: they seemed to sneer at my attempts; and his parted lips and sharp white teeth sneered too!

(Chapter XXXIV)

(とても死んでいるとは思えませんでした。ですが顔も喉も雨に洗われ、寝具はびしょぬれになっているのに、まるで身動きもしません。見開いた眼を閉じてやろうとしました。できることならその怖ろしい、まるで生きているようにかっと見開いた歓喜の凝視を消してしまいたかったのです。)

死人の眼が大きく見開いたまゝである等とは如何にも凄惨な描写であるが、だが歓喜の凝視—gaze of exultation—というのは、勿論 Catherine のもとに漸くのことで行けるといふ喜びでもあるが、彼の愛は親子二代に亘って遂に真の意味での完成

を見たという大いなる押え切れない歓びの故ではなからうか。

だが次の様な文に接する時、

“If Linton died,” I answered, “and his life is quite uncertain, Catherine would be the heir.”

“No, she would not,” he said. “There is no clause in the will to secure it so : his property would go to me; but, to prevent disputes, I desire their union, and am resolved to bring it about.”

(Chapter XXI)

〔「何しろあのお弱い体ですから、もしリントン坊ちゃんまが亡くなればキャサリンが相続するわけですか」

「いや、そうはいかぬ。先代リントンの遺言状にはそんなことはない、リントン家の財産はわしのものだ。しかしいざこざはさげたいからあらかじめあの二人を結婚させておこう。必ず実現させるぞ。」〕

The mortal terror he felt of Mr. Heathcliff's anger,

(Chapter XXVII)

父ヒースクリフの怒りをどうしようもない程恐れるリントンの様子等を読めば、ヒースクリフの仕打ちが「愛」の完成の為である等と云えば、それは余りにも曲解であると云われるかも知れない。だが彼女の初期のものに次のような小品がある。

### Butterfly

...the first-person protagonist wanders on a summer day through a peaceful wood, but in the processes of nature, she can see only an insane mutual destruction. Within a flower she finds “an ugly caterpillar,” a symbol of human activity upon the earth, which can only derive its sustenance from annihilation; and she arrives at an unavoidable question: Why was man created? He torments, he kills, he devours: he suffers, dies, is devoured — that's his whole story” From this cycle there is seemingly no escape. She throws flower and insect to the ground and tramples them. But just as she does so, a butterfly, “a symbol of the world to come,” flutters before her eyes; and the truth is revealed: “this

---

glove is the emblem of a new heaven and of a new earth whose meagerest beauty infinitely surpasses mortal imagination<sup>7</sup>; and the greater conclusion is inferred: <sup>(1)</sup>

主人公はある夏の日、平和な森を散歩し乍らそこに自然の営みを見付ける。そこに見出したものは、唯気狂いじみたお互を破滅させてしまう程の行為であった。そして花の中を見ると醜い毛虫が生れている。地上に於ける人間の行為の結果を象徴するものである。それは前者の滅亡を通してのみ存続することが出来る。次の疑問を回避することは出来なかった。「何故人間は生れて来たのだろうか」人を苦しめ、殺し、人を滅し又悩み、自分も死に、自ら滅亡する、これが総べてである。これから人間は遁れることは出来ないのか。」花も虫も地上に投げ捨てようとする。するとその瞬間蝶がヒラヒラと眼の前に舞い上るのを見た。やっと真実が分った。この蝶こそ「未来の世界」の象徴である。この世とは、その卑しい醜さは想像に絶するものがあるが、新しい天地を創り出すものであって、偉大な結論が推理されるのである。

これはブラッセルの学生時代にエミリーがフランス語の勉強の為にフランス語で書いた論文で彼女はこの時既に「生」の意味を解釈している。「嵐ヶ丘」こそは彼女のこの説の立証になるものである。

人生の真意は美しいものの創造であり、その過程は如何に醜くとも、それは許容されることであり、美しいものさえ生ずれば深い意味があるのであると、若い時から考えて居たのであれば、ヒースクリフの言語が一面如何に憎しみに満ち荒々しいものであるにしろ、それは美を生み出す為の一つの行程の中に仕組まれた言語行動に過ぎないのであるならば、彼の残虐な行為言動を唯表面からだけ皮相的に受け取ることは出来ない。その行程を経て産み出される美こそ、愛の完成というものである。

美しいものを生み出す為には、人間は争も辞さないで、突進しなければならぬ場合もある。美しいものを生み出す為の犠牲は余りに大きくても、勇敢にもその醜なる面を描いて人間性を追求しようとした処に、エミリー・ブロンテの偉大さがあり、彼女によって創造されたヒースクリフなる人物の偉大さもそこに存するのだと思うのであります。

姉シャーロットは妹の生活態度の基盤は何であると考えていたか。それは総べての

---

(1) The Image of the Book in *Wuthering Heights* by Robert C. Mckibbon

苦しみを耐えることも出来たのも基督教の教義を学んだからであろうとしている。私も矢張り彼女の愛の完成という目標は根本的に宗教的な

I have said that she was religious, and it was by learning on those Christian doctrines in which she firmly believed, that she found support through her most painful journey. <sup>(1)</sup>

愛の精神に基くものであると信じ、姉シャーロットの言葉を引用してこの論文を終るものであります。

---

(1) Biographical Notice of Ellis and Acton Bell —Charlotte Bronte—

---

文 献

Wuthering Heights

The Modern Library: New York

Emily Brontë

Wuthering Heights

The World's Classics

Wuthering Heights

研 究 社

Critics on Charlotte and Emily Brontë

George Allen and Unwin LTD

Judith O'Neill

A Wuthering Heights Handbook

The Odyssey Press. New York

Lettis and Morris

The Genesis of Wuthering Heights

Hong Kong University Press

Mary Visick

The Three Brontës

Kennikat Press

Sinclair